

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第54号

平成29年9月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

15歳で従三位に叙され、奥州に下向した顕家 正行、辞世の歌に比される血涙の上奏文

若くして散った北畠顕家と正行

相変わらずの猛暑日が続く中での例会開催となりましたが、嬉しいことに、また新たな仲間一人が加わり、新鮮な気持ちでの例会スタートとなりました。

しかも、新たに加わった仲間の祖父が四條畷出身の相撲取りで、かつて大関（この頃横綱はなく最高位）を張り、しかも化粧まわしに菊水紋が入っていたとか。この大関に抱っこされた写真があったとのことだが、現在、行方不明とのことで、会員からは、「是非見たい」との声が異口同音に上がりました。

さて、8月のメインテーマは「正行と北畠顕家」です。

最初に、参考文献を紹介すると、「花将軍 北畠顕家」横山高治・著、「日本中世史を見直す」佐藤進一・網野善彦・笠松宏至・共著、「北畠顕家～足利尊氏が最も恐れた人物」桑原敏真・著、「南朝の若武者 北畠顕家」大島延次郎・著、等があります。

まずは、上記参考文献等を基に、顕家の生涯から見ておきましょう。

北畠顕家21年の短い生涯

北畠顕家は、元応元年1318、北畠親房の長男として生まれます。元弘3年1333、早くも15歳にして従三位に叙され、陸奥の守として奥州に下向しますが、この時、父、親房も同道しています。

当時、遠国へ任官された地方官は、自ら赴かず目代を派遣して国務にあたらせた。

天皇は、顕家を御前に召し、勅語を下し、御衣・御馬を与えて、下向を申しつけた。この頃、御衣を賜るのは陸奥の守だけで、御衣・御馬を下されるのは太宰司や太宰大弐だけで、特別の待遇であった。義良親王も同行したもので、顕家に与えられた任務の大きさ・重要性が分かる。

建武2年1335、足利尊氏が反旗したため、顕家は鎮守府将軍に任じられ、12月、義良親王を奉じて陸奥の国を発進、14日には近江坂本に入り、楠正成、結城宗広、名和長年らと京都市街戦を戦い、尊氏討伐を果たし、翌年3月、権中納言に任官し、奥州に帰還します。

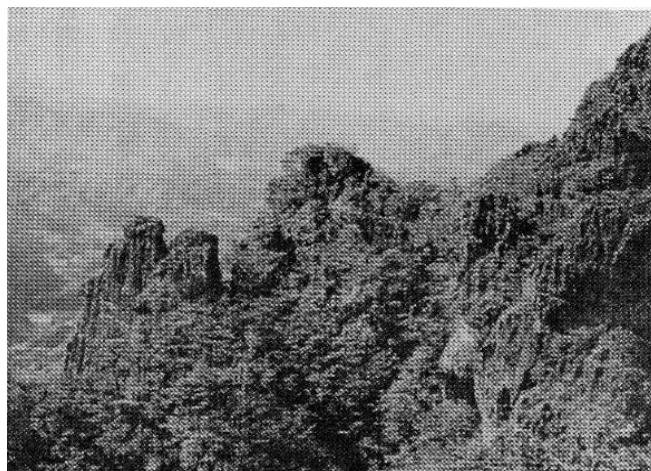
楠木正成が「正成亡き後、尊氏の天下になる」と予言した如く、この後の素早い足利尊氏の東征を考えると、早々と下した顕家の奥州帰還の判断が、後世の歴史に大きな禍根を残すことになったとも言えるでしょう。

九州で息を吹き返した尊氏の東征に対し、後醍醐帝は

霊山城の築かれた霊山は、福島市から東北へ約22キロ。険しい阿武隈山地の北端にそびえる標高805メートルの峻嶒で、全山が奇岩怪石と絶壁からなり、岩城、岩代の国境をなしている。

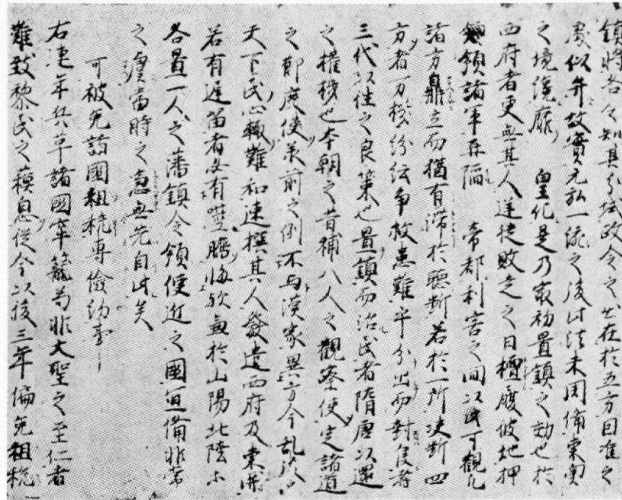
山頂からの眺めは雄大で、東は岩城・陸前の東海岸からはるか牡鹿半島、西は福島市、二本松市、郡山市に至る福島盆地を一望に見晴らす景勝地である。

今も、おびただしい史跡が散在し、四季を通じ人々が訪れる。(↓写真 霊山)



頭家に再三再四の出兵を求めますが、足利方の攻勢もあり頭家は奥州を動けませんでした。

延元3年1338、勅命を受け、ついに義良親王を奉じ霊山を発し西上します。鎌倉制圧後、1月、美濃青野ヶ原の戦いで多くの兵を失いますが、伊勢、奈良、河内、天王寺、摂津、阿倍野と激戦を繰り返します。この中で楠党との共同作戦も展開しますが、5月22日、堺浦石津の戦いで討死し、21歳の短い生涯を終えます。



上奏文案写（京都・醍醐寺三宝院所蔵）

頭家、血涙の上奏文を送る

未来の展望なき戦いの中で、討死1週間前の5月15日、頭家は後醍醐帝に上奏文を書き吉野に送っています。忠誠を尽くし、悲憤さえ感じさせる上奏文です。

この上奏文は、頭家戦死後、父親房が東国、常陸で苦戦中、血をばく思いでしたためた「神皇正統記」執筆のきっかけとなったともいわれていますが、父子ともに南朝を基にした国家の在り様、政治的信念、理想を表明しています。

横山高治は、花将軍北畠頭家の中で、「後に四條畷の戦いを前に、楠正行は辞世の歌、文章を残しているが、頭家の奏上文とは好一對のものであった。」と書いています。

また続けて、「南北朝以降、昭和に至るまで、武将や兵士が出陣にあたり、遺書を書く慣わしは、この頭家の上奏文と正行の辞世の歌が大きな教訓とさえなったのである。」と書いています。（上奏文は楠正行通信55号に掲載）

頭家と正行に出自の違い

頭家の上奏文は7か条からなり、第1条の前半部分は欠落しているとのこと。

詳しくは正行通信55号に全文を掲載しますが、頭家は上奏文の中で、①地方に人材を送り、地方のことはその人材に任せること、②3年間、租税を減免すること、③官吏の登用、恩賞は慎重にすること、④辺境の無名戦士に所領を分かち与えること、⑤臨時の行幸、宴飲を差し控えること、⑥法は厳粛に執行すること、⑦政道に有益

でない公卿、女官、僧侶らを取り除くこと、を訴えています。

上奏文を読み解く

- *二度までも奥羽54郡の兵士を率い、雪、風の中を、数百里の山河を戦い続け、その忠誠なる部下やその留守を耐え忍んだ家族の心中を思い、血をばく思いで訴えたもの
- *丹心の蓄懐を述べさせた自信の裏付けは、足掛け5年にわたる、陸奥の国での労苦に満ちた政治的・軍事的経験を置いてほかにない。
- *地方分権制の確立を説く第1条は、自己の成功の上に立っていることは明らかである。
- *奥州という辺境での苦しい体験、そこで育まれた激しい感情が、頭家の書いた、あるべき政権論に高い説得力を与えている。
- *「功あるものと雖も、これを賞するには土地を与えるべきで、みだりに高位高官を授けることは慎まなければならない」とする考え方は、父、親房も同様に、親房同様に恵まれた公卿名家として、“公家優越武家蔑視”を感じさせる。
- *名門村上源氏の末裔北畠の嫡男として生まれ天皇が頼みとする中で奥州を舞台に戦い続けた頭家。一方、河内の豪族楠氏の嫡男として生まれ、公家優越武家蔑視の中で黙々と吉野の宮を支え続けた正行。ともに南朝を支え続け、若くして討死するという、大きくは同じ運命ともみえるが、如何ともしがたがった出自の違いが、正行の悲哀！
- *頭家が「花の将軍」なら、正行は「雑草の大将」とでも言うべきか。似て非なる二人。
- *自慢の息子を若くして亡くした親房は、頭家を十分補佐しなかった正行を恨んだのではないか。親房の主戦論と正行の和睦論の確執が四條畷の戦いの序章となっていくが、石津で頭家をなくした親房は、「生き残った正行よ。何をぐずぐずしているのか。頭家を死に追いやった責任はお前にもある。」と、檄を飛ばしたのではないだろうか。

花将軍 北畠頭家の誕生

元弘元年1331、3月4日、京都の西園寺公宗の北山第で、天皇臨幸の基に花の宴が催されました。

この時、わずか14歳の貴公子、頭家は紅梅の上衣をかざして陵王の舞を舞い、その息をのむような美しい光景を天皇、居並ぶ公卿たちは見守りました。（増鏡、舞御覧記）

花の将軍と云われるゆえんのようにですが、武略のみならず、学問、舞踊、芸術等にも精通していたことが伺える頭家の1コマです。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）